

日本中國學會報 第七十一集
三〇一九年十月十二日 發行 拔刷

二十四諸天における佛道習合について

二階堂善弘

二十四諸天における佛道習合について

二階堂善弘

はじめに

中國で比較的大きな規模の寺院や廟を訪れると、二十四諸天、あるいは二十諸天という神々が祭祀されているのを見ることが出来る。杭州の靈隱寺^①、上海の玉佛寺など、大きな寺院には必ずといってよいほどその像が祀られている。ところが、日本の寺院には少數の例外を除いて祭祀が見られない。日本の場合は、それに近いものとして二十八部衆があり、京都の蓮華王院三十三間堂や仁和寺觀音堂、清水寺などに祀られるものがある。この二十四諸天と二十八部衆の共通點と相違點について、筆者は以前に考察を行った^②。

二十四諸天は、韋駄天や四天王、摩利支天・鬼子母神など、佛教に取り込まれたヒンドウの神々を中心に構成されている。一方で、紫微大帝や東岳大帝などの道教の神々も含まれている。つまり、その存在自體が當時の佛敎と道教の習合の様相を示すものといえよう。本論では、この二十四諸天の形成を中心に、明清期の佛道習合の狀況について検討するとともに、以前の論に若干の修正を加えたい。

一、「雙林坐化」雜劇における護法神

二十四諸天、あるいは二十諸天は、一般に通俗文學作品においてはあまり目立たない存在である。しかし雜劇「雙林坐化」においては全編にわたって登場し、活躍する。

「雙林坐化」雜劇は、『大般涅槃經』^③などの佛典を淵源とするもので、釋迦如來がまさに入滅しようとする時の狀況を描いた作品である。劇のなかでは、二十諸天を主とする護法神たちが次から次へと登場し、釋迦如來を守護するために盡力する。『孤本元明雜劇』の「提要」では、この劇の内容について次のように述べる。

原標「釋迦佛雙林坐化」。明抄本。不著撰人姓名。記釋迦佛在雙林說法、魔王波旬勸其涅槃。又有毘婆達多假做重身婦人、將釋迦訕謗萬狀。釋迦遂傳法於阿難・迦葉而示寂。於是韋駄率諸天神前來迎接。華光講主領衆禽捉邪魔、使之不得擾害。佛仍出棺見佛母畢、卽生天界。^④



仁和寺の二十八部衆（部分）

日本中國學會報 第七十一集



杭州靈隱寺の二十諸天（部分）

一三六

この雑劇に登場する神々であるが、まず二十諸天がある。この二十諸天は、二十四諸天に比して緊那羅・紫微大帝・東岳大帝・雷神が抜けており、道教系の神々を缺く。それではこの雑劇に登場する神々は佛教・ヒンドゥー教系のもので統一されているかといえ、そうでもない。

まず第一折では、魔王波旬が釋迦如來に面會を求めて現れるが、ここで如來に付き従うのは、天龍八部の神々と天蓬・天猷元帥である。天蓬元帥と天猷元帥は、佑聖眞君・翊聖眞君とともに北極四聖を構成する有名な道教の神である。この劇の舞臺は天竺(インド)のクシナガラであるはずなのだが、そのあたりは全く顧みられることもなく、これらの神々が當然のように登場する。ただ天蓬と天猷元帥の姿は密教の明王に酷似しており、他の護法神と一緒に登場してもそれほどの違和感はないかもしれない。

第二折では、四天王の多聞天(毘沙門天)が登場し、二十諸天を自らの宮殿に呼び寄せる。しかし、その自稱は「多聞李天王」となっている。李天王は劇中で次のように述べる。

舉目遙觀十萬里、通天徹地人難比。掃蕩妖魔神鬼怕、護國佑民萬萬紀。吾乃北方多聞李天王是也。久居北方毘沙門天宮、護持如來教法。因吾神通廣大、變化多般、世尊加護世大藥叉教主。今有魔王波旬請佛入滅、未知世尊許他也不會。吾神在此毘沙宮、聚二十諸天神聖。

すなわち多聞天は李天王であり、毘沙門天宮にあると述べる。

もちろん、毘沙門天王と唐の武將の李靖が結合して、「托塔李天

王」という神に變化していったことはよく知られている。小説『西遊記』など多くの通俗文學の作品において托塔李天王は登場し、子の哪吒太子とともに活躍する。

しかし一方で、明末においては托塔天王と多聞天はさらに別の神に分かれたと考えるのが一般的である。現在寺院や廟で見られる姿も、托塔天王は寶塔を持ち、多聞天は傘を持つため、その形象も異なっている。實際に、小説『西遊記』においては李天王と四天王は全く別の存在であり、また『封神演義』においても、李靖(李天王)と魔家四將(四天王)は全く別個のものとして扱われている。

一方で、元代から明代中期にかけては、「毘沙門李天王」として、多聞天と李天王を一體のものとして扱う。元代の『唐僧取經圖冊』の標題には「毘沙門李天王」の號が見えており、また『水滸傳』にも「毘沙門托塔李天王」の表現が見える。

この第二折において、李天王の呼びかけに應えて、残りの四天王が現れ、次に功德天と辨財天が来る。また密迹金剛が堅牢地神・菩提樹神を率いて登場、續いて娑竭龍王が閻魔王と梵天を連れて現れ、摩醯首羅が散脂大將とともに来る。さらに日宮天子・月宮天子、摩利支天・鬼子母神が登場する。最後に韋馱天が遅れて現れる。どうもこの劇では帝釋天が缺けており、李天王がその機能を代行しているように思える。

第三折では、毘婆達多の企みを阻止するために「華光講主」が登場し活躍するが、これは道教で馬靈官とされる華光大帝のことである。ここでも、如來を守護する護法神として道教の神々が登場し、舞臺が天竺であることは當然のように無視される。

またこの場面では、華光大帝は五顯神・千里眼・順風耳を率いて登

場する。この記述もやや不可解で、一般に華光は五顯神のなかの一人として扱われる場合が多い。とはいえ『三教搜神大全』などでは、華光と五顯を別のものとして扱う。そして現在では千里眼と順風耳は媽祖の配下の神として知られているが、もともとは華光大帝の部下であるとされてきた。おそらくは、五顯と華光を分けることと同じく、元代の民間信仰を反映しているものと考ええる。

つまり、この雜劇が記録されたのは明の末と考えられるが、実際にはそれ以前の信仰がかなり強く反映されているものと考えられる。「雙林坐化」劇の成立をどの時点に置くかは意見が多岐に分かれているが、その中に元代の信仰の影響が強く見られることは、李天王や華光大帝に關する記述から判断して肯定してよいと考ええる。

またこの劇では道教の護法神が佛教の如來や菩薩を守護することは極めて自然な形で行われている。當時は天蓬・天猷元帥や華光大帝・五顯神などの道教系の神々が、二十諸天と協力することも、ごく当たり前のことであると認識されていたのであろう。

もつとも、通俗文學の多くの作品で佛道の神々の混在は当たり前のように行われている。たとえば、小説『西遊記』第四回では、天界の南天門を守護するのは増長天王で、その配下に龐天君、劉天君、苟天君、畢天君、鄧天君、辛天君、張天君、陶天君などの元帥神がいたりする。明初の『西遊記雜劇』においても、天竺の地において寒山・捨得が登場したり、その地に大權修利が存在するなど、地理的な條件を無視して神々を登場させることは他にいくらでも例が存在する。

二、二十四諸天の變容

中國における二十諸天の最も古い像としては、山西大同の善化寺、

同じく大同の華嚴寺のものが知られている。ともに、遼・金の時代の建造物を残す寺院として有名な存在である。ただ、善化寺は二十四諸天、華嚴寺は二十諸天の像を存する。

善化寺は唐代からあるという古刹で、もとは大普恩寺といった。金の天會六年（一一二八）から皇統三年（一一四三）の間に重修され、元の至元年間にも改築が行われている。さらに明の正統年間、明の英宗から名を賜り、善化寺となつたとされる。

善化寺の構造は、主に山門、三聖殿、大雄寶殿、普賢閣、文殊閣から成る。山門はまた天王殿とも稱される。このうち、三聖殿と普賢閣は金代に建てられたもので、大雄寶殿は遼代の建築を残すものだけという。

ただ、大雄寶殿に祀られるのは、東方阿閼佛、南方寶生佛、中央毘盧遮那佛、西方阿彌陀佛、北方不空成就佛のいわゆる「五方佛」であり、釋迦如來ではない。釋迦如來は文殊・普賢菩薩とともに三聖殿のほうに祀られている。これは奇妙で、大雄寶殿には通常、「大雄」釋迦如來が祀られるのが普通であり、殿の名稱と像が一致していない。實は金代の記録によれば、その時は大雄寶殿ではなく、「大殿」と稱されていたことがわかる。またこの五方佛の像については遼代か金代の作であることは、ほぼ間違いないと思われる。

この大雄寶殿の五方佛の兩側に十二體ずつ、二十四諸天の像が並んでいる。しかし、この二十四諸天像は、二十諸天に緊那羅・紫微・東岳・雷神を足した一般に知られる二十四諸天とは異なるものである。

善化寺の二十四諸天像の比定については研究者によって見解が分かれる面もあるが、一應、次の二十四尊であると考えられている。

梵天・帝釋天・風天・大自在天・
日天・月天・韋駄天・羅刹天・地天・
菩提樹神・大黒天・尊星天・摩利支天・
辨財天・毘沙門天王・持國天・廣目天・
增長天・鬼子母神・吉祥功德天・
散脂大將・密迹金剛・娑竭羅龍王

龍王を水天に比する説などもあるが、ほぼ二十諸天に風天・大黒天・尊星天・羅刹天を足したものとなる。これらの神々のうち、いくつかは密教の十二天を構成する神でもある^⑩。

袁志偉氏は、この善化寺の二十四諸天の構成について、天台系の「金光明懺法」に由来する二十諸天と、密教に關連の深い尊星天・羅刹天などが組み合わされて成ったものと分析する^⑪。

もうひとつの來源としては、もちろん二十八部衆が想定される。二十八部衆と二十四諸天では重複する神も多い^⑫。しかし二十八部衆は千手觀音の眷屬としての性格が強く、「金光明懺法」に由来する二十諸天とは、ややあり方が異なる。

濱田瑞美氏の研究によれば、千手觀音の眷屬については、二十八の神に限られることなく、烏樞沙摩明王や軍荼利明王など、様々な神々^⑬がさらに加わるといふことである。そのバリエーションは多彩で、統一的な組み合わせはむしろ見極めにくい。おそらく、二十八部衆と二十諸天はそれぞれ別個に發展してきたもので、部分的な相互影響が存在するのみであると推察する。

四川大足の石刻に、「千手觀音變」が描かれているものがいくつか存在する。胡文和氏の指摘によれば、これらの千手觀音の從神として

は、やはり二十八部衆が祭祀されるのが大半であるようだ^⑭。これからは、おそらく宋代にも二十八部衆の祭祀が残っていることがうかがえる。

しかし、善化寺の二十四諸天と、のちに發展した二十四諸天の間には、やはり何らかの關連があるものと考ええる。

たとえば、善化寺の二十四諸天には尊星天、すなわち尊星王^⑮が含まれているが、これは尊星王の神格が明確であった頃の意識の殘存であると考えられる。しかし、尊星王の信仰はその後、衰退していった。その結果、同じ北極星の神格である道教の紫微大帝に置き換えられたものと推察される。尊星王については、日本では妙見神に習合する形で信仰が變容していったが、同様の事象が中國でも起こっていたと考える。

では東岳大帝の場合はどうかといえば、これは閻羅王からの轉換が想定できるものの、二十諸天にも閻羅王が含まれることから、その可能性は薄いと考えられる。あるいは大黒天の變容か。

筆者は以前到北京大悲寺大悲殿の二十八天について、二十四諸天との比較を行った^⑯。ただ筆者は大悲殿の像を實見したことがなかったため、その比定については記録のみに基づいて行った。ところが、のちにいくつかの關連論文を読み、二十八天の比定に複数の異なる意見があることを知った。いま關連論文に基づき訂正するとともに、合わせて二十八天と二十八部衆の異なる點について述べてみたい。

大悲寺大悲殿の二十八天像について、王敏慶氏は次のように比定する^⑰。

梵天・帝釋天・摩呼洛迦・阿修羅・

紫微大帝・迦樓羅・乾達婆・婆數仙人・
緊那羅・閻魔王・大自在天・吉祥天女・
毘沙門天・持國天・廣目天・增長天・
日天・月天・韋駄天・密迹金剛・摩利支天・
辨財天・散脂大將・鬼子母神・菩提樹神・
堅牢地神・東岳大帝・難陀龍王

王氏の論では、これまで維摩詰像と見なされていた像は婆數仙人像で、緊那羅と考えられていた像は迦樓羅像で、地藏王と見なされていたものがむしろ緊那羅であるとする。この比定においては、三十三間堂の二十八部衆の像を参考にしている。確かに指摘の通り、二十八天は觀音の從者に當たる者であるのに、そこに地藏菩薩が來ることはあり得ないと考えられる。これは緊那羅に比定すべきであろう。

もうひとつ大慧寺大非殿の像を論じたものに、刑鵬氏の注目すべき論がある。刑氏は「大悲殿内の二十八尊の護法神像の造られた時期は異なっており、二十諸天が明代の作品であり、その他の八體は清代中期に作られた」ものであると主張する。これについては、筆者はいずれの説が正しいか解を持たない。憶測では、二十八部衆の影響から二十八天を構成したものの、當時はもう正確な二十八部衆を再現することが難しく、やむなく二十諸天に追加する形で二十八天を形成したものでないかと推察する。

また清代の小説であるが、呂熊『女仙外史』の第一回には、二十四諸天が登場し、そのなかの鬼子母神が上奏する場面がある。清代になると、二十四諸天という呼稱はすでに一般化しているようである。

三、日本に傳來した二十四諸天

日本では蓮華王院三十三間堂や仁和寺觀音堂など、多くの寺院に二十八部衆が祀られているのに對し、二十四諸天はほとんど例がない。ただ、静岡濱松の黄檗宗寺院、初山寶林寺にはおそらく唯一の例として二十四諸天の像が祀られている。

寶林寺は記録によれば、隱元禪師に從つて來日した獨湛禪師が住持として招かれて成つた寺院で、寛文七年（二六六七）に殿宇が完成し、その内部の像は現在もほぼ當時のものが残っている。本殿である佛殿には、中心に釋迦如來像があり、達磨大師と梁の武帝と傳えられる像がある。二十四諸天はまた二十四天善神とも稱し、佛殿の兩脇に並んでいる。

その寶林寺二十四善神の構成は、次の通りである。

梵天・帝釋天・毘沙門天・持國天・廣目天・
增長天・密迹金剛・摩醯首羅・散脂大將・
辨財天・功德天・韋駄天・堅牢地神・
菩提樹神・鬼子母天・摩利支天・
日宮天子・月宮天子・娑竭羅龍王・閻魔王・
關聖帝君・天照大神・八幡菩薩・春日明神

この組み合わせは非常に興味深い。二十諸天を基本としているのは間違いないが、その上に、關帝と天照神・八幡神・春日明神が加わっている。このうち八幡神などの神はひとまわり小さな像となっている。諸天を示す札には他にも楊公大人の文字も見えているが、これは神と



二十四諸天における佛道習合について

いう扱よりも、寺院建立の恩人としての意味のようで、諸天には含めないこととする。

黄檗宗の寺院においては、長崎崇福寺に媽祖や關帝を祀り、また長崎興福寺においても、媽祖・關帝・三官大帝などを祭祀する。すなわち、道教・民間信仰の神を併存して祀ることが行われている。京都宇治の萬福寺においても、伽藍殿に華光大帝を祀り、伽藍神として扱っている。ただ、二十四諸天を祀る例はほとんどなく、筆者も寶林寺の一例を知るのみである。

高志縁氏の指摘によれば、京都泉涌寺に藏される二十二幅の「諸天圖」がこれに近い構造を持つという。高志氏はまた泉涌寺の復興された時期は、寶林寺の創建時期と近いことについて注意する。

谷口耕生氏は、京都嵯峨野清涼寺の釋迦像厨子扉繪のいくつか、泉涌寺の「諸天圖」と近いことについて検討する。また現今の「諸天圖」は俊苧が宋から將來した「十八天圖」に基づいて江戸時代に新たに作り直されたことを指摘する。さらに、護法神の数が十二天、十六天、十八天、二十天、二十四天と變化していった経緯について考察する。そのうち十八天とは、次の通り。

- 大功徳天・大梵天・東方天・南方天・
- 摩利支天・執金剛神・菩提樹神・
- 日宮天子・詞梨帝南・大辨才天・
- 帝釋天・西方天・北方天・韋駄天・
- 散脂大將・堅牢地神・月宮天子・鬼子母神

泉涌寺の「諸天圖」は、この十八天に「名川大川」「五神」などを加

えて二十二幅としている。興味深いのは、稻荷大明神が加わっていることである。すなわち、日本では護法神に日本神道の神々を加えることは、これも當然のように行われていたものと考えられる。寶林寺の例も、二十諸天を基礎に、黄檗でよく祀る關帝を加え、さらに八幡神などの神道の著名な神々を加えたものであろう。すなわち、佛敎道教の習合のみならず、神道との習合も行われているのである。

西谷功氏によれば、泉涌寺の「五神」とは、「韋駄天・大帝菩薩・摩訶迦羅神・訶利帝母・稻荷大明神等」であるという。このうち、摩訶迦羅はすなわち大黒天であり、訶利帝母は鬼子母神を指す。そして大帝菩薩とは、伽藍神である祠山張大帝のことである。

このように佛敎・道教・神道の神によつて護法神が混在することは、禪宗の回向文えこうもんなどによく見られるものである。すなわち、『諸回向清規』には、祠山張大帝・大權修利・掌薄判官・感應使者などの伽藍神の名とともに、八幡菩薩・松尾明神・稻荷明神・春日明神・熊野權現・白山權現・日吉山王・牛頭天王・天神などの名がある。

餘談であるが、これらの諸天像のなかに描かれる帝釋天の姿は、時に冕冠を着けた中華の帝王風にされることがあり、比定が難しい要因ともなっている。

四川大足の聖壽寺は、三世佛殿と圓通殿が中心となる寺院であるが、その前面に帝釋殿が設けられている。通常の寺院とはかなり構造が異なっている。その帝釋天の像を見ると、完全に中華の帝王風である。さらに、從神として鄰近に控えるのが關帝や華光大帝などの道教の神々である。一見すると帝釋天には見えず、玉皇大帝とその從神としか思えない。護法神のいくつかが道教系の神に變容していくのも、こういった紛らわしい現象が影響している可能性は高い。

おわりに

ここまで、「雙林坐化」雜劇に見える二十諸天や、大同善化寺の二十四諸天、それに濱松の寶林寺の二十四善神を取りあげ、その變容について考察を行った。付表として「二十四諸天・二十八天など比較表」を末尾に付す。この表においては、いくつかの寺院の具體的な構成を擧げ、かつ大慧寺の二十八天については、以前の論文で誤つて認識していた點を修正した。

二十八部衆は「千手觀音變」を背景に、二十諸天は「金光明懺法」に基づき、おのおの發展してきた。ただ、中國では二十諸天のほうが流行し、二十八部衆はほとんど顧みられなくなる。そして現在の寺院で見られる護法神は、二十諸天、或いは二十四諸天が主流となつていく。

この二十四諸天が形成されるうちに、道教の神々が徐々にその一部を占めるようになっていくことは、當時の道教と佛敎の習合のあり方をよく示すものと考ええる。

一方で、日本では二十諸天は全くといってよいほど祭祀されていない。そして二十諸天に日本の神道の神々を加えて二十四善神を形成することが行われたが、これは日本独自の發展であり、非常に興味深い。

注

(1) 筆者「二十四諸天と二十八部衆」(『東アジア文化交渉研究』關西大學東アジア文化研究科第六號、二〇一三年)二二九～三三六頁。

(2) 二十四諸天に屬する神々は、一般に梵天・帝釋天・毘沙門天王・持國

天・廣目天・增長天・密迹金剛・摩醯首羅・散脂大將・辨財天・功德天・韋駄天・堅牢地神・菩提樹神・鬼子母天・摩利支天・日宮天子・月宮天子・娑竭龍王・閻魔王・緊那羅王・東岳大帝・紫微大帝・雷神である。

(3) ここでは王季烈輯『孤本元明雜劇』(臺灣商務印書館、一九七七年)第九册所收のものを用了。また、『大般涅槃經』などは『大正大藏經』(大藏出版)涅槃部第十二卷に所収。

(4) 前掲『孤本元明雜劇』第一册「提要」五〇張。

(5) 内容は次の通り。もともとは「釋迦佛雙林坐化」と稱す。明の抄本である。原著者の姓名は記されていない。釋迦如來が雙林において說法するところ、魔王の波旬が現れて涅槃に入ることを勧める。また毘婆達多が身重の婦人に化け、釋迦如來を誹る。釋迦如來は阿難・迦葉に法を傳えて涅槃に入ろうとする。そこで韋駄天が二十諸天などの護法神を率いて如來を迎えんとする。華光講主(華光大帝)はまた護法神を率いて妖魔を退け、涅槃を安寧たらしめんと盡力する。釋迦如來が棺から出てみるとそこには母の摩耶夫人がおり、すなわち天界に生じたものであった。

(6) 前掲『孤本元明雜劇』第九册「雙林坐化」四〇五張。

(7) 内容は次の通り。目を擧げて十萬里のかなたを見て世界を見渡すことは他者の追隨を許さず。妖魔を討伐し神鬼恐れ、國を護り民を守ること萬代に及ぶ。われはすなわち、北方多聞李天王これなり。久しく北方毘沙門天宮に住し、如來の教法を護持せり。われは神通廣大にして、その變化は數限りなく、如來はわれを護世大藥叉教主に封ず。いま魔王波旬があつて如來に涅槃への入滅を勧めておる。如來がそれを許したかどうかはまだ分からぬ。われはこの毘沙宮において、二十諸天の護法神を招集せしところなり。

(8) 李天王については、筆者『明清期における武神と神仙の發展』(關西大學出版部、二〇〇九年)二二〇―二三頁参照。小説『西遊記』については、

『李卓吾評本西遊記』(上海古籍出版社、一九九四年)を用了。

(9) 『封神演義』については、鍾伯敬批評本に基づくとする『封神演義』(江蘇古籍出版社一九九一年)を使用した。

(10) 『水滸傳』については、『容與堂本水滸傳』(上海古籍出版社一九八八年)を使用した。『容與堂本水滸傳』一七八頁参照。また『唐僧取經圖冊』については、磯部彰『西遊記』資料の研究(東北大學出版會、二〇〇七年)一三一―一九五頁参照。さらに、李天王的變化の時期については、劉文剛『哪吒神形象演化考論』(『宗教學研究』二〇〇九年第三期)一七八―一八一頁参照。

(11) 華光大帝については、筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』(關西大學出版部、二〇一二年)七五―一六頁参照。

(12) これについては、黎薈『中國古典雜劇中的外族文化』(『山西師大學報(社會科學版)』第二八卷二期、二〇〇一年)四七―五二頁、羅斯寧『明代無名氏雜劇芻議』(『文化遺產』二〇一五年第四期)四四―五〇頁、楊惠玲『全明雜劇』的編刊及其影響』(『民族藝術研究』二〇一七年第六期)一四一―一四七頁などを参照。「雙林坐化」を元代の作と見なす説もある。

(13) 前掲『李卓吾評本西遊記』四五頁。

(14) 筆者『西遊記雜劇』における華光と大權(『東アジア文化交渉研究』關西大學文化交渉學教育研究據點第三號、二〇一〇年)四一―四八頁を参照。

(15) これについては遠藤純祐「善化寺(山西省大同市)の伽藍構成について―華嚴と密教が融合した一形態として―」(『現代密教』第一八號二〇〇五年)一六七―一九〇頁、及び何莉莉「善化寺」(『五臺山研究』二〇一〇年三期)五一―五三頁参照。

(16) 大雄寶殿については、筆者「大雄寶殿考」(『東アジア文化交渉研究』關西大學東アジア文化研究科第九號、二〇一六年)一九七―二〇六頁參

- 照。
- (17) 張明遠「善化寺五方佛塑像的創建年代及其相關問題研究」(『敦煌研究』二〇〇九年四期) 五五〜六六頁參照。
- (18) ここでは、袁志偉「大同善化寺二十四諸天像考辨」(『世界宗教研究』二〇一一年第四期) 三一〜四七頁、牛志遠「論遼金寺院彩塑的時代特徵——以大同善化寺大雄寶殿內二十四諸天爲例」 八三〜八四頁などを參照した。
- (19) 十二天は、一般に梵天・帝釋天・火天・閻魔・羅刹天・水天・風天・毘沙門天・大自在天・地天・日天・月天で構成される。
- (20) 前掲袁志偉「大同善化寺二十四諸天像考辨」四六頁。
- (21) 前掲筆者「二十四諸天と二十八部衆」二三五〜二三六頁參照。
- (22) 濱田瑞美『中國石窟美術の研究』(中央公論美術出版、二〇一二年) 三一〜三五九頁。
- (23) 胡文和『四川道教佛教石窟藝術』(四川人民出版社、一九九四年) 二七三〜二七九頁。
- (24) 前掲筆者「二十四諸天と二十八部衆」二二九〜二三六頁。なお二十八部衆の神については、密迹金剛・那羅延・持國天・增長天・廣目天・毘沙門天・梵天・帝釋天・毘婆迦羅王・五部淨居天・沙羯羅王・阿修羅王・乾闥婆王・迦樓羅王・緊那羅王・摩睺羅王・金大王・滿仙王・金毘羅王・滿善車王・金色孔雀王・大辨功德天・神母天・散脂大將・難陀龍王・摩醯首羅・婆敷仙人・摩和羅女となる。なお、仁和寺などの像ではこれに風神・雷神を加えて三十天となる。
- (25) 王敏慶「明代北京大慧寺彩塑内容考辨」(『文博』二〇一〇年二期) 六五〜七五頁。
- (26) 刑鵬「北京大慧寺諸天塑像の後續調査與研究」(『文物春秋』二〇一六年一期) 六八〜七三頁。
- (27) 呂熊「女仙外史」(百花文藝出版社一九八五年) 第一回一〇頁。
- (28) 長崎の唐寺の諸神については、前掲筆者『アジアの民間信仰と文化交流』二一三〜二一九頁參照。
- (29) 高志縁「泉涌寺藏『諸天像』をめぐる考察——諸天の構成と配置に着目して——」(美術史學會研究發表資料、二〇一四年) を參照 https://www.bijutsushi.jp/pdf/files/reikai-youshi/2014_03_15_nishi_01_takashi.pdf。
- また高志氏より多くの參考資料を提供いただいた。
- (30) 谷口耕生「清涼寺釋迦如來立像舊厨子扉繪考——金光明懺法諸天圖の一遺例——」(『佛教美術論集卷五・機能論』竹林舎、二〇一四年) 三七二〜三九七頁。
- (31) 西谷功『南宋・鎌倉佛教文化史論』(勉誠出版、二〇一八年) 四二〇頁。
- (32) 祠山張大帝については、前掲筆者筆者『アジアの民間信仰と文化交流』三七〜四八頁參照。
- (33) 詳しくは筆者「明代江南における伽藍神」(『關西大學東西學術研究所紀要』第四十八輯、二〇一五年) 五九〜六八頁を參照。また原文は次の通り。
- 祝獻。護法諸天大權眞宰三界萬靈十方至聖、今年歲分主執陰陽權衡造化善惡聰明、南方火德星君火部聖衆、十方檀那本命元辰吉凶星斗、本寺護法祠山正順昭顯威德聖列大帝、大權修理菩薩、土地護法冥王掌簿判官、感應使者、日本國伊勢太神宮、八幡大菩薩、賀茂下上大明神、松尾大明神、平野大明神、稻荷大明神、春日大明神、熊野三所大權現、白山妙理大權現、熱田大明神、日吉山王、祇園牛頭天王、北野天滿大自在天神等。總日本國內大小福德一切聖賢厨司監齋使者、修造方隅禁忌神將次翼。

・付表 二十四諸天・二十八天など比較表

難陀龍王	沙羯羅王	緊那羅王	迦樓羅王	乾闥婆王	阿修羅王	毘婆迦羅王	摩醯首羅王	大辨功德天	散脂大將	王	那羅延堅固	密迹金剛力士	毘沙門天	毘樓博叉天	東方天	帝釋天	梵天	二十八部衆 (風神・雷神を加える)
	娑竭羅	緊那羅					摩醯首羅天	大辨天	散脂大將			金剛密迹天	毘沙門天王	毘留博叉天王	帝釋天	梵天王	二十四諸天	
陀		緊那羅	迦樓羅	乾闥婆	阿修羅		摩醯首羅天	吉祥天女	散脂大將			密迹金剛	多聞天	廣目天	持國天	大梵天	二十八天 (大慧寺)	
	娑竭羅龍王				羅刹天		大自在天	吉祥功德天	散脂大將			密迹金剛	毘沙門天王	廣目天	持國天	梵天	二十四諸天 (善化寺)	
	娑竭羅龍王						摩醯首羅	功德天	散脂大將			密迹金剛	毘沙門天王	廣目天	持國天	梵天	二十四善神 (寶林寺)	
難陀龍王	娑加羅龍王	緊那羅王	迦樓羅王	乾闥婆王	阿修羅王	畢婆迦羅	大自在天	吉祥天	散脂大將	(二王)	那羅延天	金剛力士	多聞天	廣目天	持國天	梵天	一般的な名稱	

二十四諸天における佛道習合について

				雷神	風神													摩睺羅王		
				雷神			紫微大帝	東岳大帝	月宮天子	日宮天子	閻摩羅王	摩利支天	菩提樹神	韋駄天將軍	堅固地神	婆藪仙人	鬼子母天		五部淨居天	
							紫微大帝	東岳大帝	月天	日天	閻魔羅	摩利支天	菩提樹神	韋駄天	堅牢地神	婆藪仙人	鬼子母		摩呼洛迦	
					風天	大黑天	尊星王	月天	日天	閻摩王	摩利支天	菩提樹神	韋駄天	地天	鬼子母神					
春日明神	八幡菩薩	天照大神	關聖帝君					月宮天子	日宮天子	閻魔王	摩利支天	菩提樹神	韋駄天	堅牢地神	鬼子母天					
春日明神	八幡神	天照大神	關帝	雷神	風神	大黑天	紫微大帝	東岳大帝	月天	日天	閻魔王	摩利支天	菩提樹神	堅牢地神	婆藪仙人	鬼子母神	滿善車王	滿仙王	金大王	
																			金比羅	
																				孔雀明王
																				五部淨
																				摩睺羅伽